

# 感情が語学学習に与える影響 ：置き去りにされた課題

鈴木 栄\*

## Impact of emotions on language learning: The elephant in the room

Sakae SUZUKI

### Abstract:

Although they have impact on learners' individual differences, emotions have been neglected in the SLA literature. This might be because emotions have been viewed as the private and inner reactions of an individual. Based on literature review of studies on emotions and language learning, this article argues that emotions are interpersonal and socially derived. Implications for language teaching shall be discussed.

**KEY WORDS:** Learners' emotions, Affect, Motivation, Beliefs

### 要旨:

学習者が、学習の過程で感じる感情(emotion)は、学習促進や学習への動機の低下に繋がるものであるが感情と学習に関する研究は多くはない。本稿は、感情に焦点を当て、言語学習における感情の役割について、主として外国語教育・学習に関する文献検索から、感情の定義、ポジティブ・ネガティブな感情の外国語学習への影響、そして、教育への示唆を論じるものである。

**キーワード:** 学習者の感情、情意、モチベーション、ピラーフ

## 1. はじめに

多言語が交わる社会における共生に必要な人間の資質のひとつは、empathy(共感)であろう。相手の身になって考える、という英語の表現に、"be in someone's shoes"がある。「相手の靴を履いた気持ちになって」、という意味である。外国語を学習することは、empathy(共感)を育むことに繋がるのではないかと。なぜならば、一部の語学の天才を除いて、多くの人は、外国語を学習する過程で、intimidated(萎縮する)感情を抱き、そうした負の感情が、自分と同様に外国語を学習する人々への共感、あるいは、理解を生むからである。

外国語を学習している時に、間違えることで「恥ずかしさ」を感じたり、相手の話すことがわからずに「不安」を感じたりすることは誰にでも経験がある。逆に、小さなタスクができたことで、「喜び」を感じることもある。

そうした感情が、外国語学習に対する考え方や態度に

影響を与えることは容易に想像できる。「楽しい」と感じることができれば、学習への意欲も湧くであろう。では、学習者は、何を楽しいと感じるのか、授業という枠組みの中で、学習者が感じていることを教える側は知ることができるのか、など、様々な疑問も湧いて来る。

外国語学習の研究で、感情(emotion)に焦点をあてたものは多くはない。言語学習ほど、学習者がいろいろな感情を抱くものは無く、特に、新しい言語を学習する時には、間違いや思い込みがつきものであり、それに付随して感情が湧くことは当然のことである。感情に関する研究は少ないが、それは感情というものが移ろい易く、把握しにくいからであるのかもしれない。

本稿では、言語学習における感情の働きや、それらの言語学習への影響について、文献レビューを基に論ずる。

## 2. 定義と働き

感情は、英語ではemotionである。日本の心理学の世界では、専門用語として、「情動」という言葉が広く使われている。応用言語学や第2外国語習得の分野では、

\* 湘南工科大学 総合文化教育センター 教授

感情の影響を表す語として affect が使われており、日本語では、「情意」と訳されている。「情意」には、影響の意味も含まれるため、本稿では、単に emotion の日本語訳である「感情」を用いることにする。

Goleman(1995)<sup>1)</sup>は、有名な著書『Emotional Intelligence (心の知能指数)』の中で、人間の行動は、理性的な心 (rational mind) と、感情的な心(emotional mind)によって決定されるとしている。「時として、両者が混合した行動を取ることもあり、第三者から見ると矛盾した行動のように見えることもある」、と記述している。感情に関しては、「感情の表し方は、人生経験や文化によって異なる。個人的な場面においてどのように感情を提示するか、あるいは押し殺すかは、背後にある文化によって決まる」、と述べている。また、アカデミックなインテリジェンスは、感情生活においてはほとんど関連性が無い、つまり、IQ が高い人間が、感情的に豊かで思いやりがある感情知性を持ち合わせているわけではない、としている。

感情の揺れは現在進行している経験や過去の経験の影響を受ける。Kahneman & Riis (2005)<sup>2)</sup>は、過去の経験からの「感情的な振動(vibes)」が、現在の意識や態度に影響をする、と述べている。そして、その証拠として、研究の結果、感情的な振動には、経験する自己(experiencing self)と、思い起こし自己 (remembering self) が関係しているとした。例えば、ある学習者が、授業の中で、よい感情経験と、悪い感情経験を持ったとする。その経験は、経験する自己である。同じ学習者が、学期が終わった時に、授業はどうであったかと感想を聞くと、思い起こし自己が、授業中のピークの経験と、谷底の経験を思い出し、総合的に授業を評価することになる。授業中の経験自己の瞬間的な感情は、学習者の振り返りの記憶には残らないこともあろうが、将来の考え方や行動への感情的な振動になることは予測されるとしている。

Fredrickson(2001)<sup>3)</sup>は、人間の発達に感情が大きく関係しているという研究結果を出した。「ポジティブな感情は、人間の考えや強さを広げてくれる働きをする」と記述している。ポジティブな感情が学習をどのように援助するのか、その過程を研究する必要がある。そうした研究結果の1つとして、Gardner(1985, 2009)<sup>4)</sup>は、学習過程におけるポジティブな感情が重要な役割を果たしているのは、興味、願望、楽しさ、であるという結果を出している。

こうした文献から、人の感情が行動に関係すること、感情は、現在の経験のみならず過去の経験からも影響を受けること、ポジティブな感情が学習にプラスの影響を与える可能性があることがわかる。

### 3. 第2言語習得および応用言語学における感情

第2言語習得および応用言語学の分野では、学習者に焦点を当てた研究 (学習者個々の違い individual learner differences) が主流となっている。学習者がどのように言語を学習するモチベーション(motivation)を持ち、行為主体性 (agency) を作り上げ、自主的な学習者(autonomous language learner)になるのか、そして、教室内では、どのような教師や学習の影響が、不安(anxiety)や高揚感(flow)を生み出すのか、といった研究が進められてきている(MacIntyre & Gregersen, 2012<sup>5)</sup>, Tassinari, 2016<sup>6)</sup>。

学習者へのそうした感情の影響は、総称して情意(affect)とされている。affect とは、"the emotional interpretation of perception, information or knowledge"(受け取った知識、情報、認知の感情的な解釈)(Huitt, 1999)<sup>7)</sup>とされており、こうした情意が学習者の考え方や学習過程に及ぼす影響については、脳科学、心理学、教育学の分野で研究されている。外国語および第2言語の学習過程では、独特な感情が関係していることもあり、注目すべきではあるが、感情が外国語学習に及ぼす影響についての研究はそれほど多くはない。

認知理論では、感情と学習には密接な関係があり、感情と認知の交歓によって学習がもたらされる、としている。また、脳生物学者(LeDoux 1996)<sup>8)</sup>は、人間の脳の中では、行動と感情は密に繋がっている、と言及している。外国語学習においては、学習者は、心理学的に「脆い」状態におかれることが多く(Brewer, 2013)<sup>9)</sup>、伝えたいのに伝えられない、相手が言っていることがわからない、などのフラストレーションを抱えながら学習を続けていく。そうした状況の中で、学習者が体験するポジティブ (ネガティブ) な感情は、確実に言語学習に影響を与える。学習過程において学習者が抱く感情は、移ろいやすいが、そうした感情が影響を与えるのは、学習者のピルーフ (考え方)、心の状態、モチベーションである。

第2言語教育 (英語) では、認知(cognition)と感情(emotion)は別々に研究されてきており、前者が優先され、後者の研究は少ない。感情の言語教育への影響については、Krashen(1985)<sup>10)</sup>が、affective filter (情意フィルター) に言及し、言語学習の過程において、ネガティブな感情が多く出てくると、情意フィルターが作用し、ネガティブな感情によって学習者は精神的にブロックされてしまい、理解可能なインプットが、学習者には届かない、としている。逆に、ポジティブな感情が多くなると、学習者の情意フィルターの数値が下がり、学習者は、理解可能なインプットを受け取ることができる、としている。つまり、ネガティブな感情は学習を妨害し、ポジ

ティブな感情は、学習を促す、ということである。

これまで、言語学習の研究においては、対象とする言語への認知的知識、学習の過程や領域に焦点が当てられてきたが、外国語の学習や習得が、どのように感情や気持ちといった複雑な web（網状組織）に彩られているかについての考察が必要であるという認識が広まりつつある。LeDoux(1996) は、『The Emotional Brain』という著書の中で、「心には、思考と同様に感情があり、どちらかだけを研究するのでは満足のいく結果は得られない」、と述べている。感情とは、モチベーション、ヒープなどといった心理学的な側面に大きな影響を与えていると予測されることから、感情に焦点をあてた研究が望まれる。言語学習における感情の理解が必要であるのは、感情が効果的な言語学習に繋がることで、ネガティブな感情が引き起こす問題を克服し、ポジティブな感情を引き出すこととなる可能性があるからである。

Kalaja et al.(2016)<sup>11)</sup>は、言語教育・学習における感情の影響を下のように図式している(鈴木 2016)<sup>12)</sup>。

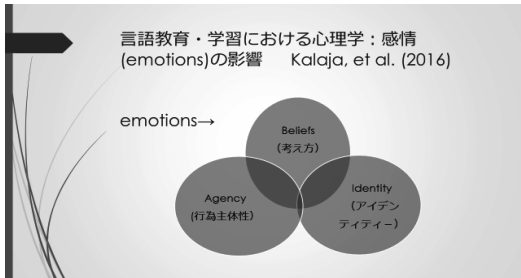


図1 短期海外研修による学生の意識の変化（言語文化教育研究会第2年次大会武蔵野大学）鈴木栄（2016）

感情による反応は、身体に出るもの、表情などに出るもの、そして主観的な気持ちに出るものがある、と考えられているが、そうした反応について、最近の脳科学の分野では、脳の神経組織を研究したものがある。John Schumann (1999)<sup>13)</sup>は、脳科学の研究者であるが、感情に関して興味深い研究をしている。脳の働きが言語学習にどのような影響を与えているか、言語学習者の脳は感情反応に繋がる外的な刺激(external stimuli)をどのように評価しているか、について研究し、こうした外的な刺激の要因を、appraisals（評価）と名付けた。appraisals（評価）がどのようなものかわかれば、教師は、学習者の刺激になり、動機付けに繋がると予想されるシステムティックな学習の枠組みを作り、学習者のポジティブな感情的応を予期することができる。

Schumann(1999)が作った刺激の評価と感情反応のフレームワークでは、5点について述べている。目新しさ、楽しさ、現在の目標に準じていること、特定の状況において自分ができると感じること、社会的・文化的な基準

に合っていること、理想的な自己概念に合っていること、である。外国語学習にこれを当てはめてみると、どのような学習を提供すれば、学習者が感情的にそれを受け入れ、学習へのモチベーションにつながるかが予測できる。例えば、英語学習に当てはめてみると、「これまでの学習の繰り返しではなく、新しい情報があり、楽しさを感じられ、自分が到達できそうな目標に沿っている。現在の社会で求められる能力の育成ができる内容であり、それが達成できれば、理想的な自分の実現が可能になる」、と学習者が感じることができカリキュラムおよびシラバスの設定をすることで、学習者の高いモチベーションを維持することができる、と予測される。

#### 4. 外国語学習におけるネガティブ・ポジティブ感情

言語学習の過程で学習者が持つネガティブな感情がどのようなものであるかについては、外国語学習を経験した人であれば、誰でも想像がつくであろう。クラスメートの前で間違いをしてしまった時や発表がうまくいかなかった時に感じる embarrassment（戸惑い）の感情や、できない問題の解答を指名されるかもしれないという anxiety（恐怖）などが代表的なものであろう。一方、ポジティブな感情には、問題が解けた時や、発表がうまくいった時、または、テストで高得点を取った時などに感じる「自信感」や「達成感」につながる喜び（elation）があろう。Fredrickson(2001)は、ポジティブな感情を持つ人は、より多様な見方をすることができ、トピックや領域に積極的に踏み込み、新しい経験や学習に向かっていく、としている。

外国語学習において、ポジティブな感情を持つことは、テストの点が高い、授業中の活動がうまくいった、という限定された領域内に限られたことではない。継続するポジティブな感情は、いかにポジティブな経験や人間関係を持ち、他人に対してもよい行動を取るかという「行動への価値観」に根ざしている。外国語学習の場で考えると、学習は、言語学習に関するポジティブな経験に基づいて構成されること、そうした経験にはポジティブな社会関係が含まれていること（教室内外において）、が望ましいということになる。

##### 4.1 ネガティブな感情

ネガティブ感情に関しては、第2言語教育や応用言語学の分野では、不安に関する研究がもっとも多くなされている。新しい言語を学習し始める時には、不安はつきものであり、外国語不安(foreign language anxiety)と定義されている(Horwitz, Horwitz, & Cope, 1986)<sup>14)</sup>。外国語を使用することは個人的に意味のあるメッセー

ジを伝えることであり、それが上手くない時には、フラストレーションが溜まる。そして、不安な感情が湧くことで、自己評価が下がり、自信を失うことになる。第一言語の世界においては自信があり、尊敬もされ、地位のある人でも第2言語においては自信喪失を感じることは多い。特に、多感な10代の若者達は、人前で恥を掻くことや、自分の言葉を伝えられないことでストレスを感じやすい。また、学習する外国語のイメージや、それに対する思い込みが学習者の気持ちに影響を与えることもある。Williams, Burden, & Lanvers (2002)<sup>15)</sup>の研究では、アメリカの高校の男子生徒は、「フランス語は愛の言葉だ」と言い、発音すると女性的だと思われるので、皆の前でフランス語を話したがる、という結果まであるほどである。こうした感情は、言語学習の妨げになることは間違い無い。MacIntyre & Gardner (1994)<sup>16)</sup>は、言語学習において感情にもっと関心を払うべきであるとしており、中でも「不安」は、緊張や憂鬱な気持ちを引き出すとして、学習過程でマイナスの影響を与える、と述べている。

言語学習に関する不安には、いくつかの種類がある(Oxford, 1990)<sup>17)</sup>。自尊心(self-esteem)のように個人的な資質に関するものから、授業中のアクティビティーや授業方法など学習過程に関するものもある。不安を生み出すものには、低い自尊心、曖昧さへの耐久力(tolerance of ambiguity)の低さ、リスクの受け入れ(risk-taking)への抵抗感、競争(competitiveness)、社会性不安(social anxiety)、テスト不安(test anxiety)、アイデンティティーやカルチャーショック、偏ったビリーフ(beliefs)、授業活動・方法(classroom activities and methods)、教師との関係(instructor-learner interactions)が源となっている。こうした様々な不安が観察される学習者の状態としては、回避、身体的な行動(音を出したり、邪魔をする行動など)、身体的な症状(頭痛、筋肉の硬直、苦痛)などがある。これらの不安に気づくこと、対応方法を考えることが重要である。

## 4.2 ポジティブな感情

不安のように、言語学習の障害になる感情もあるが、一方、言語学習をサポートするような感情については研究されているのだろうか。応用言語学では、学習の障害となる不安感情については、問題であるとされ研究も多くされているが、ポジティブな感情についての研究はほとんどされてこなかった。近年になり、教育や社会心理学の分野でいわゆる、positive psychology(Heffron & Boniwell, 2011)<sup>18)</sup>に注目が集まってきた。人間の強さを理解し、ポジティブな心理学を推奨することは大切なのではないかという認識が広まってきた。第2言語研究の分野では、ごく最近になって、MacIntyre, Gregersenなどがポジティブ心理学の発展と、言語教育への影響と

示唆を視野においた研究を始めている。

言語を勉強した人であれば、達成感や自己肯定感を感じたこともあるであろう。言語学習の楽しさを経験した人もいるであろう。そして、何よりも言語を通して多者との関係を築くことができた喜びを感じた人も多くいるはずである。Fredrickson(2009)は、ポジティブな感情こそ人々の興味や考え方を広げることができる、と述べている。ポジティブな感情を持つ人の方が、多様で創造的な思考を持つことができ、トピックや分野における活動に前向きに取り組むことができる。そして、新しい経験や学習に進むことができるのである。

ポジティブな感情(positive emotions)で、日常生活において観察されたものは、Fredricksonによると10項目ある。それらは、joy(喜び) gratitude(感謝) serenity(平静) interest(興味) hope(希望) pride(誇り) amusement(楽しさ) inspiration(刺激) awe(畏敬) love(愛)である。Dewaele & MacIntyre (2014)<sup>19)</sup>は、楽しみの感情は、高い学習到達に関係するとし、Oxford(2011a)<sup>20)</sup>は、ポジティブな感情は、言語学習者の自律を高める、と述べている。

## 5. 感情が言語学習に与える影響

言語学習・教育を心理学の側面から研究した論文の中から、特に、感情に焦点をあてたものを紹介する。

### 5.1 学習アドバイザーと学習者の会話における感情の影響

Tassinari(2016)<sup>21)</sup>は、ベルリンの大学に設立された自律言語学習センターで、自律的な学習者になるための支援としての1対1のアドバイスの中で、学生と学習アドバイザーの対話における感情について調査をした。学習アドバイザー(1名)と学生(3名)の談話は録音され、談話分析がなされた。

感情の特徴について、Tassinariは、「感情の特徴は、学習の過程において、それらがダイナミックで変動するものであり、学習とコミュニケーションの過程で関わる同級生、教師、パートナー、学習者のビリーフ、心の状態、モチベーションに影響される」としている。

学習アドバイザーの仕事は、学習者が自身の問題に対する気づきが無く、学習へのモチベーションが低い場合には困難を要する。そうした場合には、学習の過程やアドバイスの過程に現れる感情の問題を意識し、アドバイスをおこなう必要があるとしている。学習アドバイザーの3つの役割は、1)学習者の学習や自身に対する考え方(ビリーフ)を聞き観察すること、2)学習に関して概念的な、あるいは方法論的な情報を学習者に与える

こと、3) 学習過程において、精神的なサポートをおこなうことである、としている。

理論的な枠組みとして、Tassinari は、Bandura (1997) 22) の社会学習理論(social learning theory)を使い、言語学習は、学習者の認知、感情、生物学的な出来事や、学習の過程における学習者や他の学習者の態度、学習環境や社会環境に影響されるという立ち位置を取っている。研究軸は、学習者と学習アドバイザーの談話に感情がどのように現れるか、どの程度の頻度でそれが現れ、学習アドバイスや学習の過程にどのような影響があるか、とした。

この研究では、2つの顕著な発見があった。第1の発見は、学習者の談話の中で感情が重要な位置を占めていることである。大学という状況の中で、試験、論文、成績が学生達の感情に影響を与えていることがわかった。学習者の discourse の中には顕著な感情的表現が、過去の学習と今後の学習に関して観察された。また、感情は学習者が特定のタスクに対する自身のパフォーマンスをどのように評価しているかに関係していることがわかった。第2の発見は、学習アドバイザーの談話には、ほとんど感情が観察されなかったことである。アドバイザーは、自身の談話を、学習者の談話に合わせており、時折学習者が見せる強い感情を調整していることがわかった。結果を踏まえて、結論として、Tassinari は、言語学習のアドバイスにおける感情の表現についての研究は学習アドバイザー育成には必要であることを強調している。

## 5.2 2人の学習者の話：指導、モチベーション、感情、関わり、忍耐

Oxford と Bolanos-Sanchez(2016) 23) の研究は、ポジティブな感情が学習者のアイデンティティーを変え、困難を克服するという positive psychology の視点から、最終的には英語を教える教授となったコスタリカの2人の英語学習者 (Laura, Jamie) を研究対象とし、ナラティブ分析をおこなった。

感情については、「感情は、言語学習を進める、あるいは、妨げることに重要な役割を果たす」としている。そして、感情知性 (emotional intelligence) を、「自己や他者の感情を理解し、そうした感情を思考や行動の情報源として使う」能力と定義し、言語学習の成功には不可欠なものである、としている。

ナラティブ分析の結果、ポジティブな感情については、Laura は、高校教師に対する尊敬の念に言及している。また、留学したアメリカで、ホストの父親のジョークを理解できた時の喜びと、アメリカ人の教師から研究者の素質があると言われた時の誇りの感情について述べている。誇りの感情は、その後も、教師、ホストファミリ

ー、アメリカ人の友人達、他の学生との交流の中にも出現する。そうした誇りの感情を持ち帰国した Laura は、コスタリカで文学を志す。Jamie は、新しい情報源に繋がった時、自主的に学習している時、コミュニケーションが成功した時に、ポジティブな感情が湧いた経験をしている。

両者とも、言語学習者として、恩師の足場づくり (scaffolding) により高い自主性と、それに伴って、自信を得ることができた。二人のナラティブからは、教師の重要な役割と、学習者が持つ、理想の自己像の重要性がわかる。

## 5.3 感情とコミュニケーション能力の関係

荒木 (2010) 24) は、英語学習歴の長い、上級レベルの社会人、大学院生 46 名を対象として、感情がコミュニケーション能力にどのように作用するかについて調査をした。結果をコミュニケーション能力育成指導に活かすことが目的であった。

調査は、質問状をもとに被験者が自己評価をする、という方法でおこなわれた。自己評価には、CEFR (欧州言語共通参照枠) を使用した。8つの感情要素について調査をおこなった。自尊心、危険負担、不安、共感、抑制、外向性、内向性、寛容である。この感情要素は、Brown(2000) 25) の第2言語習得の研究から引いてきたものである。

結果としては、コミュニケーション能力が、自尊心、外向性というプラスの感情を高め、不安、抑制、内向性というマイナスの感情を下げることに役立つ可能性を統計的に示した。コミュニケーション能力の素地を養うことを目標としている小学校への英語教育導入に関して、生徒は、感情が大きく揺れ動く成長期にあることから配慮が必要である、としている。

## 5.4 リメディアル教育における自尊心感情と英語学習

清田 (2010) 26) は、リメディアル教育における英語学習では、学生の習熟度に合わせた動機づけの方法を開発することが必須であるため、対象となる学生の意識を把握する必要があるとして、学生を対象に調査をおこなった。

中学校や高校における英語学習の不成功を引きずり大学に入学する学生も多く、そうした学生は、英語学習に否定的な感情を持つ。そして、そうした学習意識を改善しない限り、学習意欲を喚起することは難しい。動機づけの重要な源泉として考えられているのは「自尊心感情」であるが、英語に対する苦手意識と疎外感や嫌悪の

感情を持つ学生に対しては、授業の中で自尊感情を育む必要がある、としている。

研究方法は、自尊感情を測定するために作られた「不適切な感情：社会的場面での不安、自己意識、個人的な無価値の感情」(Janis & Field, 1959)<sup>27)</sup>の質問項目から選んだ項目と、リメディアル学習対象の質問項目を足した 16 項目の質問紙によるものである。

因子分析の結果としては、2つの項目が顕著であることがわかった。第1は、「分からないことを他の人に質問するのは苦手だ」であり、第2は、「自分の意見や考えに自信がないために、それを他の人に伝えるという行為を苦手と感じる意識」である。この結果から、教室における英語学習に関しては、ペアやグループワークには学生同士の交流を促進させるように教員が介入することや、従来の知識伝達型の教授法から、学習集団内の良好な人間関係の構築を促すコーディネーターとしての役割を教員が担うなどの注意が必要である、と述べている。

## 5.5 学習者のビリーフの変化

Suzuki (2012)<sup>34)</sup>の研究では、7人の高校生のビリーフが、言語学習に関係する経験から、どのように変化をしたか、について探索をした。ビリーフと感情には関係性があることから、データの中に現れた感情に焦点をあて、実際にどのような言葉で感情を表現しているのか、感情が変化するきっかけとなった経験は何か、について変化が顕著であるものを紹介する。インタビューへの回答(データ)に現れた感情を示す部分には、下線を引いた。

Natsuko (仮名) は、私立の進学高校に在籍していたが、試験と競争に明け暮れる日々が苦痛になってきた。英語に関する興味は、両親と行った海外旅行や、英語の個人レッスンで育まれていたが、学校の英語の試験勉強には喜びを感じず、むしろ競争の中で、身体的な苦痛を感じるようになっていった。語学研修で行ったフィリピンでは、英語の勉強に対する考え方が変化をする経験をした。

「英語できなくても、伝えようと思わないと伝わらないと思って、とりあえずなんか周りを気にせずしゃべれるようになった。中学の時は、帰国子女がいるし、英語恥ずかしいよ、帰国の前じゃしゃべれない、だった。(I-19, 2008).」

「英語がしゃべれたら、ドイツ、ベトナム、韓国、アメリカとかフィリピン、もう一気に広がったじゃないですか。それが嬉しくて、あ、英語がしゃべれたら、いろんな人と繋がっている感じがすごいです。(I-3, 2007)」

フィリピンでの経験を経て、Natsuko が自分の中に作り上げた言語観は、「伝えることが重要である」という

ことであった。帰国子女の前で感じていた低い自己評価や、恥ずかしさから解放されて、自分の言葉で伝えることから喜びを得たことは大きい。「嬉しい」という感情から、英語の可能性を感じるようになったのである。

Kazuo (仮名) は、ペルーで生まれ、日本の高校に入学するまでは、現地の日本人学校に通っていた。現地で話されているスペイン語は少し理解でき、話せるが、学校での勉強は日本語でおこなった。両親が、Kazuo の将来のために英語を勉強させる必要があると考え、小学校の頃から現地の英語学校に通い始める。英語学校では、教師は、英語で授業をするため、Kazuo の英語力(話す・聞く)は上がっていった。

「最初は、面倒くさいと思っていたけれど、だんだん話せるレベルになって来たら楽しくなって来た (I 1-1, 2007)」

Kazuo にとって、オーラルコミュニケーションの焦点を当てた塾の授業は、楽しくなっていくが、一方、日本人学校の英語の授業には興味を持たなかった。

「中学校に来て、なんか遊んでました。遊んでいるというか、授業つまらないから、問題集をどんどんやってて。教科書とかも聞かれてもふつうに答えられるし、全然、勉強しなくても90点以上取れてました。(I 3-2, 2008)」

このように、Kazuo は、英語学校と中学校の英語の強の違ひの中でもがき、確固たる英語学習への自律的なモチベーションを持っていないが、彼が、中学2年の時に、日本に一人で旅行をした時の経験が、彼の英語学習へのプラスの引き金になる。

「隣に座っていた人が韓国の人で、お互い言葉が通じなかったけれど英語をやっていたので話せた。どっちもうまくないけれど、がんばって話して楽しくて。中2の時にそれがあって、英語の必要性とか、英語やっててよかったなって思って、そこから楽しくなった。塾とか。(I 1-2, 2007)」

Kazuo が英語を使い楽しいと感じるのは、人とのコミュニケーションをするときであった。不安を生み出す原因としてカルチャーショックがあるが、Kazuo の場合は、いろいろな人と話すことでカルチャーショックがあつて楽しいとまで言っている。彼のカルチャーショックの定義が、本来のものとは少し異なるようであるが、「違いを楽しい」と捉える鷹揚な姿勢を持っている。

Rumiko (仮名) は、高校生になるまで海外経験は無い。小学校の時から、学校の勉強はできて成績もよかった。中学校の時の英語の成績もいつも上位であったため、英語には自信があった。中学校の時に行っていた塾の英語の先生が生徒への精神的なサポートをしてくれたことから、Rumiko は、教師という職業に興味を持つようになった。ところが、高校に入ると、帰国子女や外国人のいる学校であったことから英語、特に、話す英語には自信が無くなった。

「英語をべらべら喋る人がたくさんいて、正直、英語

に対する自信が粉々になった。帰国子女との差に英語に対する情熱を失ったりした。発音が悪いとかっこ悪いと思った。劣等感に陥った。(Q2-1,2008.)

Rumiko は、英語への興味を失っていき、必修科目のみ履修し、スピーチやプレゼンテーションなどの上級英語科目を取ることはなかった。

Rumiko のように海外経験も無く、日本の教育の中でだけ英語を勉強してきた生徒には、同じように帰国子女に劣等感を持つものも多いであろう。劣等感によって英語の学習を避けるようになるものもいれば、逆に、そうした状況を克服するために英語学習への高いモチベーションを持つものもいるであろう。後者になれるように支援をすることが必要である。

学習者のナラティブからわかることは、英語を使いコミュニケーションが成立した時に感じる「喜び」の感情は、その後の学習への強いモチベーションとなることであり、一方、モチベーションを下げることになる感情には、「かっこ悪い」など体裁を気にするものや、自信の喪失への気持ちが含まれることがわかった。

## 6. 感情への対応方法

様々な感情が起こる可能性のある言語教育ではあるが、様々な感情に対して実際の授業ではどのように対応したらよいのであろうか。外国語教育（第2言語教育）の文献の中から示唆を紹介したい。

坂田・福田（2015）<sup>28)</sup>は、英語学習が継続的自律英語学習を実践する上で大きな課題となるネガティブな感情に対応するための具体的方策についての検討を論じた。不安に対する研究はされてきているが、その対応策についての検討は遅れている。対処法として、情意ストラテジー(Oxford, 1990)とマインドフルネス認知行動療法を提示した。

英語学習には、長期間にわたる継続的な学習が必要であり、そのためには、他律学習から自律学習への転換が必要である。社会人への調査の結果、継続的学習ができない理由として、「時間がない(28.6%)」「切羽詰まった状況にない(18.8%)」「明確な目標がない(12.0%)」「効果的な学習法がわからない(11.5%)」という結果がでた。こうした理由から、「学習先延ばし」(藤田&野口, 2009)<sup>29)</sup>が観察された。先延ばしの原因は、「学習・遂行達成への不安、完全主義、自信の欠如といった失敗への恐れに関係しており(藤田 2012)<sup>30)</sup>、その背景には、「信条体系」,「ネガティブな自動思考、不安や焦りなどの感情が一連の流れとして行動に作用する。ネガティブな感情を積み重ねることで、英語学習に対するネガティブなビリーフ(Horwitz, 1985)<sup>31)</sup>や、「何をやっても英語なんか身につかない」という学習性無力感(ピーターソン、マイヤー、セリグマン, 2000)<sup>32)</sup>が生まれてしまう。

そうしたネガティブな感情のコントロールとして、

Oxford(1990)が提案した、情意ストラテジーは、セルフコントロールをおこない(瞑想、笑う、音楽を聴く、深呼吸)、自分の不安を軽くし(自分を褒める、新しいことに挑戦する、自分を鼓舞する)、自分を勇気づける(チェックリストを使う、他の人々と自分の感情について話し合う)など、自分の感情を把握する訓練をしていくことである。

一方、マインドフルネスは、心理療法であり、認知機能、思考・感情・感覚に対する態度や関わり方を身につけることを目的(Hayes, Follette & Linehan, 2004)<sup>33)</sup>としており、その意味は、今この瞬間の心の動きに注意を向け、その動きを冷静に受け止めていく心の基盤を作ることである。「することモード」「あることモード」に分け、マインドフルネスな状態は後者であるとしている。忙しい現代社会では、ほとんどの人が、「することモード(マインドレス)」状態を過ごしており、マインドフルな「あることモード」に戻るためには瞑想などのトレーニングが必要であるとしている。

英語学習への応用については、情意面の対応が授業中にも重要であり、不安や焦りに対する基本的な対処法を学習者に伝えること、学習者が情意ストラテジーやマインドフルネスを基盤として対処法で英語学習に対するネガティブな感情をコントロールできることが重要であると考えられる。

Kohonen (1999)<sup>34)</sup>は、情意に留意した外国語教育の評価について、変化についていくつかの提案をしている。知識を伝える伝統的な教授法から、変容を目的とした学びへの移行について次のようにまとめている。

- ① 学習の概念：社会的構造主義で人間的な理論に基づいた学び。
- ② パワー関係(教師と学習者)：教師と学習者の間には、パートナーシップがあり、教師は、学習者の学びを支える、あるいは支援する者になる。
- ③ 学習者の役割：個人としてもグループの協働作業においてもアクティブに参加する。
- ④ 知識・カリキュラム観：学習過程において個人的な知識を構築し、柔軟性のあるカリキュラム。
- ⑤ 学習経験と結果：結果よりも学習過程、自尊心、学習のスキル、コミュニケーションのスキルに重きを置く。
- ⑥ 学習過程とモチベーション：学習者中心。自己管理された学習、内面の自己管理、内面を豊かにするためのモチベーションの構築。
- ⑦ 評価：学習過程を中心とした評価。経過の振り返り、自己評価。

特に、評価については、外国語教育における authentic assessment (真の評価)をおこなうための具体的な方法をあげている。

- ① オーラルインタビューをおこなう。
- ② ストーリーを書く、あるいはテキストを自分の言葉で再現する。

- ③ 様々なトピックについてのサンプルライティングを課す。
- ④ プロジェクトや展示(プレゼンテーションや協働作業)をおこなう。
- ⑤ 実験と実演(口頭と筆記)をおこなう。
- ⑥ 記述式質問への回答を課す。
- ⑦ 教師の観察(授業中の活動、ノート)をおこなう。
- ⑧ ポートフォリオ(授業中の活動と進歩の証明)を作成する。

学習者の不安を減らすために、Oxford(1990)は、授業における示唆を提示している。

- ① 学習者に外国語を学ぶ時に起こる不安感についての説明をし、これは克服できるものであると伝える。
- ② 授業内での成功経験を学習者に与え、自尊心を高める。
- ③ 威嚇にならない環境を作り、失敗を恐れずチャレンジすることを推奨する。
- ④ 授業内での競争を減らす。
- ⑤ 授業でのゴールを明確にし、学習者が、ゴールを達成できるように、学習方略を教える。
- ⑥ 完璧でなくても学習した言語を使う機会を与える。
- ⑦ 音楽や、笑い、ゲームなどで学習者をリラックスさせる。
- ⑧ 学習した内容に沿ったテストをおこなう。
- ⑨ 学生が自分のパフォーマンスを評価できるようにする。
- ⑩ 学習者に意味のある報酬を与える。
- ⑪ 様々な学習スタイルや学習方略に関係したアクティビティを提供する。
- ⑫ 学習者が不安の兆候を確認できるようにする。
- ⑬ 学習者が自己賞賛し、ネガティブな考えや感情を払拭できるようにする。

学習者のネガティブな感情の対処法として、具体的な方法を文献から紹介したが、そうしたネガティブな感情に対するポジティブな感情がどのように生まれるかにも注目する必要がある。MacIntyre & Gregersen(2012)は、ポジティブな感情がでかあがる過程に注目をすべきだとしている。ポジティブ心理学(positive psychology)を支持する研究者の間で合意していることは、コミュニティを築くこと、社会のネットワークを作ることによる親密な人間関係が人々を幸福にする、ということである。教師は、授業の中で学習者をサポートする環境を作るように努力はするが、授業内だけでなく外の世界での学習者の活動の機会を与えることをしているであろうか、と問いかけている。

## 7. まとめ

外国語教育の分野では、認知(cognition)に焦点をあ

てた研究がおこなわれてきたが、感情に焦点をあてた研究は見過ごされて来た(Swain, 2011)<sup>35)</sup>。いくつかの研究データが示しているように、学習者の感情は、モチベーションや考え方、およびアイデンティティーにも影響を与える。

紹介した文献からわかったことはいくつかある。

第一に、教える側の感情が学習者の感情に影響を与えることに留意し、教える側は、感情のコントロールをする必要がある、ということである。これは同時に、教師の役割として、学習者支援としての、学習過程における足かけが重要な意味を持つ、ということでもある。外国語は、母語から離れる経験をすることで学習者は、不安や劣等感を持つことが研究からも明らかである。そうした学習者が持つマイナスの感情を払拭するためには、教師の教室内での感情コントロールが必要である。言語学習研究では、学習者のアウトカムや評価に注目が集まる傾向があるが、実は、教師の役割も大きいことは留意すべきことである。

第二に、学習者のポジティブな感情は、コミュニケーション能力に関係しているということである。文献のデータでもわかるように、学習者は、学習している言語を使いコミュニケーションをおこなうことが可能になった時に「喜び」の感情を持ち、その感情が、モチベーションや自尊心構築にも繋がる。このことは、社会文化理論(Vygotsky, 1978)<sup>36)</sup>における言語の位置づけを裏付けるものである。すなわち、人間関係の中で使用される言語は、自己と他者との心の共鳴と同時に自己の内面的な成長を促すための重要な道具であるということである。

感情が、言語学習の過程で重要な役割を果たすことが確認された上で、次に、実際授業の中や評価でどのようにすることが求められるか、ということについて、文献からいくつかの例を紹介した。これらの例は、研究者が研究結果から引き出した結論であるが、学習は、特に、言語学習は、学習者のコンテキスト、教師の考え方、言語政策、など多くの要素が関係した環境の中で起こるものであるため、具体的な対応方法は、教える側が、学習者と向き合い、その声を聴き(Swain, 2011)感情に配慮した学習を作り上げていくことが必要であろう。

## 8. 今後の課題

感情が、言語学習に影響を与えることは、文献からも明らかであることがわかった。実際に授業中に観察をしていると、学生の表情から感情を読み取ることもできる。学習者は、外国語を学習する時には、不安感などの感情



を抱えながら試行錯誤をしていくことを、まず、教師が知っておくべきであろう。そのためには、教師自身が、外国語の学習者であり続ける必要がある。身を持って経験したことは、教える際に学習者を理解し、共感を持って学習者と向かい合うことができる。教える側が常に学び続ける姿勢を持つことはどの教科にも共通することであろうが、特に、外国語の場合には、教師が経験から得るものは大きい。

「外国語教育において、教師やカリキュラム作成者は、安全な学習カリキュラムやプログラムを作成する傾向があり、そうすることで、結果的に感情を排除してしまうことになり、予期しないことをし、臨機応変に面白いことや難しいことへの挑戦を教師がおこなうという余裕が無くなる。「授業における型にはまった活動(routine)は教室では決定的な打撃である(Dewaele,2011)<sup>37)</sup>」という指摘はもつともであろう。教師の感情もポジティブなものになり、それが学習者へと伝わり、両者の間に化学反応がおこることで、ダイナミックな授業展開が可能になる。

感情と言語学習の関係についての研究は、学習者や学習状況が多様化していく中で、ますます必要とされてくるであろう。外国語教育法や言語学の知識の範疇ではない心の問題を研究するには、本稿の文献にもあるように、心理学、社会学、脳科学など他分野の知識も必要となってくる。いろいろな分野を横断した研究が今後広まることを期待したい。

グローバル化という言葉の下に、外国語、特に英語の必要性が高まり、小学校からの長い英語教育がおこなわれることになった。生徒達が心理的な軋轢を感じることなく英語を学ぶことができ、異なる文化や価値観に触れ、日本内外で言語でのコミュニケーションを楽しみ豊かな人生を送ってほしいと願う。

## 参考文献

- Goleman, D. (1995). *Emotional Intelligence*. NY: Bantam Books.
- Kahneman, D., & Riis, J. (2005). Living, and thinking about it: Two perspectives on life. In F. A. Huppert, N. Baylis, & B. Keverne (Eds.), *The science of well-being*, (pp. 285-304), Oxford: Oxford University Press.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden and build theory of positive emotions. *American Psychology*, 65, 45-55.
- Gardner, R. S. (2009). Gardner and Lambert (1959): Fifth years and counting. Presented at the annual conference of the Canadian Association of Applied Linguistics, Ottawa ON, May, 2009.
- MacIntyre, P. & Gregersen, T. (2012). Affect: The role of language anxiety and other emotions in language learning. In Mercer, S., Ryan, S., & Williams, M. (Eds.), *Psychology for language learning*, 103-118, Palgrave Macmillan.
- Tassinari, M. G. (2016). Emotions and feelings in language advising discourse. In Gknou, C., Tatzl, D. & Mercer, S. (Eds.), *New directions in language learning psychology*, Springer.
- Huitt, W. (1999). Conation as an important factor of mind. *Education Psychology Interactive*. Retrieved April 16, 2015 from <http://www.edpsycinteractive.org/topic/conation/conation.html>.
- LeDoux, J. (1996). *The emotional brain*. New York, NY: Simon & Schuster.
- Brewer, S. S. (2013). Entre emotions et conrole de soi : Un enjeu essential pour l' autonomie dans l' apprentissage des langues. *Lidil, Revue de Linguistique et de Didactique des Langues*, 48, 189-208.
- Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implication*. London: Longman.
- Kalaja, P., Alanen, R., & Dufva, H. (2008). Self-portraits of EFL learners: Finnish students draw and tell. In P. Kalaja, V. Menezes, & A. M. F. Barcelos (Eds.), *Narratives of learning and teaching EFL* (pp. 186-198). New York: Palgrave Macmillan.
- 鈴木 栄 (2016). 短期海外研修による学生の意識の変化 『言語文化教育研究会第2年次大会』、武蔵野大学。
- Schumann, J. H. (1999). A neurobiological perspective on affect and methodology in second language learning. In J. Arnold (Ed.), *Affect in language learning*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70 (2), 125-132.
- Williams, M., Burden, R. & Lanvers, U. (2002). French Is the Language of Love and Stuff': Student Perceptions of Issues Related to Motivation in Learning a Foreign Language. *British Educational Research Journal*, Vol. 28, No. 4 (Aug., 2002), pp. 503-528
- MacIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1994). The subtle effects of language anxiety on cognitive processing in the second language. *Language Learning*, 44. 283-305.

- 17) Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. NY: Newbury House.
- 18) Hefferon, K. & Boniwell, I. (2011). *Positive psychology: Theory, research and applications*. Open University Press.
- 19) Dewaele, J.-M., & MacIntyre, P. (2014). The two faces of Janus? Anxiety and enjoyment in the foreign language classroom. In P. MacIntyre & T. Gregersen (Eds.) *Positive psychology in SLA*. Special issue of *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 4(2), 237-274.
- 20) Oxford, R. L. (2011a). Meaning-making, border crossings, complexity, and new interpretive techniques: Expanding our understanding of learner narratives, *Journal of Foreign Language Research*, 22(2), 221-241.
- 21) Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.
- 22) Oxford, R. L., & Bolanos-Sanchez, D. (2016). A tale of two learners: Discovering mentoring, motivation, emotions, engagement, and perseverance. In Gknou, C., Tatzl, D. & Mercer, S. (Eds.), *New directions in language learning psychology*. Springer.
- 23) 荒木史子(2010). 情動とコミュニケーション能力の関係について、『*Jacet Kansai*』, 12. 80-91.
- 24) Brown, H. D. (2000). *Principles of language learning and teaching* (4th ed.). New York: Pearson Education.
- 25) 清田洋一(2010). リメディアル教育における自尊感情と英語教育、『*リメディアル教育研究*』、第5巻第1号、37-43.
- 26) Janis, I.L. & Field, P.B. (1959). *Sex differences and Depersonality factors related to persuasibility, personality and persuasibility*, New Haven: Yale University Press.
- 27) 坂田浩、福田ステイブ(2015). 継続的自律学習におけるネガティブな感情への対応、『*徳島大学国際センター紀要*』、14-33.
- 28) 藤田正、野口彩 (2009). 大学生のセルフ・コントロールと学習課題先き伸ばし行動の関係、『*教育実践総合センター研究紀要*』(18)、101-106.
- 29) 藤田正 (2012). 学習課題先延ばし行動に及ぼす自己調整要因の検討、『*奈良教育大学紀要*』61(1)、43-51.
- 30) Horwitz, K. E. (1985). Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course. *Foreign Language Annals*, 18 (4), 333-340.
- 31) ピーターソン、クリストファー、マイヤー、Fステ  
 イーブン、&セリグマン、マーティン(2000). 学習性無力感パーソナル・コントロールの時代をひらく理論 (津田彰、訳) 二弊社.
- 32) Hayes, S. C., Follette, V. M., & Linehan, M. M. (2004). *Mindfulness and acceptance: Expanding the cognitive-behavioral tradition*. NY: Guilford Press.
- 33) Suzuki, S. (2012). Language learners' beliefs: Development and change. Unpublished doctoral dissertation, Temple University, Japan.
- 34) Kohonen, V. (1999). Authentic assessment in affective foreign language education. In Arnold, J. (ed.), *Affect in language learning*. Cambridge: CUP, 279-294.
- 35) Swain, M. (2011). The inseparability of cognition and emotion in second language learning. *Lang. Teach.*: page 1 of 13. Cambridge University press, doi:10.1017/S0261444811000486.
- 36) Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. M. Cole, V. John-Steiner, S. Scribner & E. Souberman (eds.), Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 37) Dewaele, J.M. (2016). Harnessing emotions in the foreign language classroom.  
<http://blogs.bbk.ac.uk/research/2014/11/19/harnessing-emotions-in-the-foreign-language-classroom/>

(2016. 9. 21. 提出)